

1. ついで主はモーセに告げて仰せられた。
2. 「ツアラアトに冒された者がきよめられるときのおしえは次のとおりでなければならない。
その者を祭司のところに連れて来る。
3. 祭司は宿営の外に出て行き、調べて、
もしツアラアトの者のツアラアトの患部がいやされているなら、
4. 祭司はそのきよめられる者のために、二羽の生きているきよい小鳥と、
杉の木と緋色の撚り糸とヒソブを取り寄せるよう命じる。
5. 祭司は、土の器に入れた湧き水の上で、その小鳥のうちの一羽をほふるよう命じる。
6. 生きている小鳥を、杉の木と緋色の撚り糸とヒソブといっしょに取り、
湧き水の上でほふった小鳥の血の中に、その生きている小鳥といっしょにそれらを浸す。
7. それを、ツアラアトからきよめられる者の上に七たび振りかけて、
その者をきよいと宣言し、さらにその生きている小鳥を野に放す。
8. きよめられる者は、自分の衣服を洗い、その毛をみなそり落とし、水を浴びる。
その者はきよい。
そうして後、彼は宿営にはいることができる。
しかし七日間は、自分の天幕の外にとどまる。
9. 七日目になって、彼はすべての毛、その鬢の毛と口ひげとまゆ毛をそり落とす。
そのすべての毛をそり落とし、自分の衣服を洗い、水をそのからだに浴びる。
その者はきよい。
10. 八日目に彼は、傷のない雄の子羊二頭と傷のない一歳の雌の子羊一頭と、
穀物のささげ物としての油を混ぜた小麦粉十分の三エバと、油一ログとを持って来る。
11. きよめを宣言する祭司は、きよめられる者と、
これらのものを主の前、会見の天幕の入口の所に置く。
12. 祭司はその雄の子羊一頭を取り、
それを油一ログといっしょにささげて
罪過のためのいけにえとし、それを奉獻物として主に向かって揺り動かす。
13. 罪のためのいけにえと全焼のいけにえをほふった所、
すなわち聖なる所で、その雄の子羊をほふる。
罪のためのいけにえと同様に、罪過のためのいけにえも祭司のものとなるからである。
これは最も聖なるものである。
14. 祭司は罪過のためのいけにえの血を取り、
それをきよめられる者の右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指に塗りつける。
15. 祭司は油一ログからいくらかを取って、自分の左手のひらにそそぐ。
16. 祭司は右の指を左手のひらにある油に浸し、その指で、油を七たび主の前に振りかける。
17. 祭司はその手のひらにある残りの油をきよめられる者の右の耳たぶと、
右手の親指と、右足の親指に、すなわち先の罪過のためのいけにえの血の上に塗る。
18. 祭司はその手のひらにある残りの油を
きよめられる者の頭に塗り、祭司は主の前で彼のために贖いをする。
19. 祭司は罪のためのいけにえをささげ、汚れからきよめられる者のために贖いをする。

そのあとで全焼のいけにえがほふられなければならない。

- 20 . 祭司は祭壇の上で、
全焼のいけにえと穀物のささげ物をささげ、祭司はその者のために贖いをする。
その者はきよい。
- 21 . その者が貧しくて、それを手に入れることができないなら、
自分を贖う奉獻物とするために、雄の子羊一頭を罪過のためのいけにえとして取り、
また穀物のささげ物として油を混ぜた小麦粉十分の一エバと油一ログを取り、
- 22 . また、手に入れることのできる山鳩二羽か家鳩のひな二羽を取らなければならない。
その一羽は罪のためのいけにえ、他の一羽は全焼のいけにえとする。
- 23 . 八日目に、その者のきよめのために、
それらを主の前、すなわち会見の天幕の入口の祭司のところに持って来る。
- 24 . 祭司はその罪過のためのいけにえの子羊と油一ログを取って、
これを奉獻物として主に向かって揺り動かし、
- 25 . 罪過のためのいけにえの子羊をほふる。
祭司はその罪過のためのいけにえの血を取って、
それをきよめられる者の右の耳たぶと、右手の親指と、右足の親指に塗る。
- 26 . 祭司はその油を自分の左手のひらにそそぐ。
- 27 . 祭司は右手の指で、左手のひらにある油を、主の前に七たび振りかける。
- 28 . 祭司はその手のひらにある油をきよめられる者の右の耳たぶと、
右手の親指と、右足の親指に、すなわち罪過のためのいけにえの血と同じところにつける。
- 29 . 祭司はその手のひらにある残りの油を
きよめられる者の頭の上に塗り、主の前で彼のために贖いをする。
- 30 . その者は、手に入れることのできた山鳩か、家鳩のひなのうちから一羽をささげる。
- 31 . すなわち、手に入れることのできたもののうち、一羽を罪のためのいけにえとして、
他の一羽を全焼のいけにえとして、穀物のささげ物に添えてささげる。
祭司は主の前で、きよめられる者のために贖いをする。」
- 32 . 以上は、ツアラアトの患部のある者で、
きよめに要するものを手に入れることのできない者のためのおしえである。
- 33 . ついで主はモーセとアロンに告げて仰せられた。
- 34 . 「わたしがあなたがたに所有地として与えるカナンの地に、
あなたがたがはいり、わたしがその所有地にある家にツアラアトの患部を生じさせ、
- 35 . その家の所有者が来て、祭司に
『私の家に患部のようなものが現われました。』と言って、報告するときは、
- 36 . 祭司はその患部を調べにはいる前に、その家をあけるよう命じる。
これはすべて家にあるものが汚れることのないためである。
その後に、祭司はその家を調べにはいる。
- 37 . その患部を調べて、もしその患部がその家の壁に出ていて、それが緑がかったか、
または赤みを帯びたくぼみであって、その壁よりも低く見えるならば、

- 38 . 祭司はその家から入口に出て来て、七日間その家を閉ざしておく。
- 39 . 七日目に祭司がまた来て、調べ、もしその患部がその家の壁に広がっているなら、
- 40 . 祭司は患部のある石を取り出し、それらを町の外の汚れた場所に投げ捨てるよう命じる。
- 41 . またその家の内側の回りを削り落とさせ、
その削り落とした土は町の外の汚れた場所に捨てる。
- 42 . 人々は別の石を取って、前の石の代わりに入れ、
また別の土を取って、その家を塗り直す。
- 43 . もし彼が石を取り出し、家の壁を削り落とし、
また塗り直して後に、再び患部が家にできたなら、
- 44 . 祭司は、はいつて来て調べ、そして、もし患部が家に広がっているなら、
それは家につく悪性のツアラアトであって、その家は汚れている。
- 45 . その家、すなわち、その石と材木と家の土全部を取りこわす。
またそれを町の外の汚れた場所に運び出す。
- 46 . その家が閉ざされている期間中にその家にはいる者は、夕方まで汚れる。
- 47 . その家で寝る者は、その衣服を洗わなければならない。
その家で食事をする者も、その衣服を洗わなければならない。
- 48 . 祭司がはいつて来て調べて、もしその家が塗り直されて後、
その患部が家に広がっていないなら、祭司は、その家はきよいと宣言する。
なぜなら、その患部が直ったからである。
- 49 . 祭司は、その家をきよめるために、
小鳥二羽と杉の木と緋色の撚り糸とヒソブを取り、
- 50 . その小鳥のうちの一羽を土の器の中の湧き水の上でほふる。
- 51 . 杉の木とヒソブと緋色の撚り糸と、生きている小鳥を取って、
ほふられた小鳥の血の中と湧き水の中にそれらを浸し、その家に七たび振りかける。
- 52 . 祭司は小鳥の血と湧き水と生きた小鳥と杉の木とヒソブと緋色の撚り糸とによって、
その家をきよめ、
- 53 . その生きている小鳥を町の外の野に放つ。
こうして、その家のために贖いをする。
その家はきよい。」
- 54 . 以上は、ツアラアトのあらゆる患部、かいせん、
- 55 . 衣服と家のツアラアト、
- 56 . はれもの、かさぶた、光る斑点についてのおしえである。
- 57 . これは、どんなときにそれが汚れているのか、
またどんなときにそれがきよいのかを教えるためである。
これがツアラアトについてのおしえである。

説教

重い皮膚病であるツアラアトは聖書に出てくる中でも最も悲惨な病で、これに冒されると強制的に隔離されます。

イスラエル人の一般住居である宿営から追い出され(13:46)、

汚れた者として公の礼拝にも参加することができず、

通りを歩く時には自分がツアラアト患者であることがわかるようにと

「自分の衣服を引き裂き、その髪の毛を乱し、その口ひげを覆って、

『汚れている、汚れている。』と叫ばなければならない」(13:45)のでした。

「汚れた」ツアラアト患者が「きよい」と宣言されるには、

病気が治癒するか、

あるいは病気が極度に進行して「頭から足まで」全身を覆うまでになるか(13:12-13)のいずれかが必要です。

後者の場合、

患者は全身がツアラアトに蝕まれ肉体が死に瀕して神さまのもとに行くことになるので「きよい」とされました。

つまり、病状が中途半端でなく、完全に悪化して、遂には死ぬようになると「きよく」なるのです。

神が共におられるようになります。

神さまとの交わりが回復します。

神さまの前に「生きた」人となるのです。

14章は、

治癒するにせよ死ぬにせよ、

「きよい」と宣言されたツアラアト患者が、

神と人の前に「きよめられる」ための儀式について教えられます。

これによると、

ツアラアト患者は、

宿営に入る前(7-8)、

七日目(9)、

そして聖所に於けるすべての儀式を終えた後(20)に、それぞれ「きよい」と宣言されています。

まず最初のきよめの儀式は、宿営の外でなされました。

二羽の生きている小鳥と杉の木、

緋色の撚り糸、ヒソブを準備し、

土の器に入れた湧き水の上で小鳥のうち一羽を屠ります。

そして、生きている小鳥と杉の木、緋色の撚り糸、ヒソブを取り、

血の混じった湧き水に浸し、それをツアラアト患者の上に七回振りかけて、

祭司は彼に「きよい」と宣言してから生きている方の小鳥を野に放ちます。

そして、自分の衣服を洗い、毛を剃り落として水を浴びて宿営に入るのでした。

それから七日間を経て、
再び衣服を洗い、全身の毛を剃り落とし、水を浴びてから、
八日目に彼は初めて幕屋に入ることを許されて神さまを礼拝します。

そこでは
まず「罪過のためのいけにえ」を捧げ、
次に「罪のためのいけにえ」を捧げて、
それから「全焼のいけにえ」と「穀物のささげ物」を捧げます。

「罪過のためのいけにえ」は
必ず「傷のない雄の子羊」でなければならず、
他のいけにえの場合のように安物で代用することはできませんでした。
しかも、通常の「罪過のためのいけにえ」の場合とは異なり、
あたかも祭司の任職の際のように、
屠られた子羊の血は
ツアラアト患者の右の耳たぶと右手の親指と右足の親指に塗られ、
それに加えて、油も
七たび振りかけられた後に
右の耳たぶと右手の親指と右足の親指に塗られて、残りの油は頭から注がれるのでした。

そうしてから、
罪の贖いのために通常捧げられる「罪のためのいけにえ」をささげ、
罪贖われた自分の全生涯を神さまに献げることが告白する「全焼のいけにえ」を神さまに捧げるのでした。

それでは、
これらのきよめの儀式には一体どういう意味があるのでしょうか。

一言で言えば、汚れて死んでいたツアラアト患者が罪を贖われ、きよめられ、いのちを回復するということです。

ツアラアト患者は、
皮膚が腐り細胞が壊死し肉体が朽ちて
死に向かうという意味に於いてこの世で最も悲惨極まりないことは言うまでもありませんが、
それに加えて、汚れているとされているため幕屋での礼拝に参加することが許されず、
さらには人々の日常生活空間からも閉め出されて社会から完全に抹殺されてしまったのでした。
ですから、言うなれば、ツアラアト患者は、肉体的、社会的、さらには霊的に死んだ状態にあったのです。
生きてはいても、事実上死んだ者、生ける屍と化していました。
こうした孤独な生き地獄とも言うべき状態にあった者が
いのちを回復していくさまが一連のきよめの儀式に見事に表現されていて貴重です。

強く丈夫な「杉の木（ヘブル語『エレズ』で檜と考えられている）」に、
同様に朽ちぬ力を象徴する強い生命力と殺菌力を持つヒソブ（「はなはっか～オレガノ～」）を緋色の撚り糸で縛ります。
そうして、はたき状にして、血の混じった水を振りかけます。
その水は新鮮な「生きた湧き水」で、
それに屠ったばかりの鳥の生き血を注ぎます。
そうして、七度その水を振りかけた後に祭司は、彼を「きよい」と宣言し、
それから生き血の水に浸した生きている方の小鳥を野に放ち、小鳥は晴れて解放されて天空へと飛び立ちます。
それはあたかも、死からよみがえっていのちを得たツアラアト患者が、
孤独な生き地獄から解放されて自由な世界へと飛び立って行く、実に清々しい、喜びと希望に満ち溢れた姿を象徴します。

その後なお七日を経て、
新しい天地創造の日、
復活の八日目を迎えたツアラアト患者は、真っ先に「罪過のためのいけにえ」を捧げます。
これはその人が神と人に対して与えた損害に対する言わば「賠償金」と言うべきものです。
それまで礼拝出席を禁じられ
やむを得なかったとは言え、
神さまに対して怠ってきたささげ物を捧げたのです。
この賠償金は必ず「傷のない雄の子羊」でなければならず、
他のいけにえの場合のように安物で代用することはできませんでした。

でも、たとえどんなに高価であっても、
ツアラアト患者にとっては、何より大きな喜びと感謝のささげ物であったことと想像されます。
なぜなら、それは、ツアラアト患者にとっては、久々の礼拝参加であったからです。
彼はこれまで幕屋で行われる礼拝に出席しなかったのです。
でも、出席することは許されませんでした。
どうしてでしょうか。
自分がツアラアトであるからです。
汚れた者と呼ばれました。
ですから、安息日を迎えても自分ひとりで神さまを礼拝するしかありませんでした。
礼拝に出たいのに出られないのです。
礼拝に行って捧げ物を捧げたいのに捧げることができません。
安息日に、他の人々はみんな幕屋に集って
神さまにささげ物を捧げて神さまを礼拝して
美味しい御馳走を喜んで食べているのに、自分だけは仲間外れです。
そういう年月を彼は何ヶ月も、あるいは何年も過ごしてきたのです。
その悲しさは、教会から除名された人の悲しみに似ているかもしれません。
でも、ツアラアト患者の場合はもっと悲惨で悲しいです。
なぜなら、除名された人は自業自得で自分の罪のためにそうなったのですが、
でも、ツアラアト患者の場合は自分の罪と関係ないのに、やむにやまれぬ病気になってそうなったのです。
ですから、礼拝に対する飢え乾きはどんなに激しく真摯であることであつたでしょうか。

そして、そのような言わば靈的に飢え渴いた彼らが、礼拝に出席できた喜びはどんなだったでしょうか。

ですから、考えてみれば当然のこととして、

これまで数年間も捧げることのできなかつた「賠償金」である「罪過のいけにえ」をまず真っ先に捧げるのです。

場合は異なりますが、

イエスさまに「失われた者」と呼ばれたザアカイが、イエスさまによって救われた時、彼はこう答えました。

「主よ。

ご覧ください。

私の財産の半分を貧しい人たちに施します。

また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」

これが言わば「罪過のいけにえ」です。

イエスさまによって見出された喜びがザアカイをしてこう言わしめたのです。

ツアラアト患者も同様です。

「罪過のいけにえ」の血は、患者の右の耳たぶと右手の親指と右足の親指に塗られ、頭から注がれました。

このことは、

それまで死んでいたツアラアト患者にいのちが回復したということがどういうことであるかを意味しています。

つまり、死んでいたツアラアト患者がいのちを回復するということは、

ツアラアト患者の耳と手足、全身が聖別されて、

神のことばを聞き、神のみことばを行い、神の道を生きて行くようになるということです。

そうして神さまとの交わりが回復し、彼は「生きた者」となります。

さらに油もその血の上に塗られます。

かくして、彼は一層靈に燃えてみことばを聞き、主の道を生きるようになるということです。

私たちも同じです。

私たちは言わばツアラアト患者です。

罪に汚れ、滅びの悲惨の中に死んでいた者です。

それがキリストの血により罪贖われ、聖靈の油が注がれて、罪と滅びから解放されました。

死んでいた者が復活を遂げたのです。

空高く天へと舞い上がりました。

永遠のいのちを与えられたのです。

永遠のいのちとは何でしょうか。

神との交わりです。

耳が開かれて神のことばを聞く者とされました。

そして、聞いたみことばの通りにみこころをなし、主の道を歩む者とされました。

キリストの血が、

聖霊の油が、この私を洗いきよめてくださったのです。

キリストにより罪贖われ永遠のいのちをいただいた私たちは、

救われた喜びと感謝をもって

神さまにささげ物をささげ、

この耳と手足を主に捧げて、

いよいよ霊に燃えて、みことばを聞き、それを行って、神と共に生きていきたいと願います。

そして、自分の家の汚れをきよめ、改造し、

私たちが住む環境、罪の世を改革して、キリストの血により洗いきよめて、神の栄光をあらわしていかれるよう祈ります。